

# 人名雑考

## 藪下 紘一

### はじめに

これは論文の体をなさない。平素気にかかっていた事を書きなぐってみた。外国へ手紙を出す時、又名刺の書き方の場合、YAMADA Taroなる書き方を実践しているが、その訳は以下の如しというものだ。ただ余計なものも混っていて、最後には日本語擁護論みた様になってしまった。

### 1. 日本での姓

日本人なら誰でも知っている名前を幾つか挙げる。

藤原鎌足

柿本人麻呂

坂上田村麻呂

坂田金時（正しくは公時）

いずれも姓と名の間「の」が入る。この「の」がとれて、

足利尊氏

新田義貞

のようになる。側聞する所によると、奈良時代に既に、姓をつけよ、という法令があったそうだが、それを実行したのは支配階級の者のみであろう。下の方の人々には縁遠い話だ。江戸時代でも農民には姓がない。×□村の△○という具合であったし、又町人でも、大工の八五郎、熊さ

ん、の様だったし、商人も屋号を用い、三河屋久兵衛とか言ったものだ。日本人全員が姓を持つ様になったのは明治時代からだ。

## 2. ドイツでの姓

Walter von der Vogelweide

Wolfram von Esehenbach

Hartmann von Aue

Gottfried von Stra Bburg

最初から、中世ドイツの大詩人達の名を挙げたが、姓がないと言おうか、von (「の」の意味) を介して出身地が右に出て来る。von は「の」とか「aus」を表わしている。この von は後世の様な貴族を表わすものではない。この von がとれて姓として定着して来たのであろう。貴族の称号としての von はスウェーデンにもとり入れられ、

Carl von Linmè

の様になっている。

これからわかる様に、日本と西洋とは姓名のつけ方が逆である。これもわかりきった事だ。だがその由来となると上で書いた様になっている。

横道にそれるかもしれないが、後世 Ludwing van Beethoven は、van は von の意味だから自分は貴族だと言い出した事があった。ところが、学者が調べて、これはオランダから来た家系で、貴族でないと発表した。さしもの気の強いベートーベンもそれ以後は黙ってしまったそうな。オランダの van は中世ドイツの von の意味である。

姓になったのは出身地ばかりではない。職業名も姓として使われている。例としては、Schmidt, Müller, Ackermann, Maler, Schuhmacher 等々。又強い動物の名前である事もある。Wolf, Lions (イギリス)。

### 3. リンネの二名法

「生物の分類の基本になる種に対して属名と種名の二語を並べる方式をいう。現在の学名はこの方式を採っている。」<sup>①</sup>又「……また動植物名を属名と種名の二つのセットでよぶ『二名法』を完成して、生物の分類をはじめて体系化し、分類学の基礎を築きあげた。」<sup>②</sup>例としては、

スギナの学名	Equisetum	arvense
人間の学名	Homo	sapiens
	(属名)	(種名)

属名が左に来て種名が右に来る。属名が種名より上位の概念である。これは日本、中国、朝鮮半島、ヴェトナム等の家族名が先きに来て個人名が次に来るのと同じである。

この分類法が、まずいとか、代案がある、又は出ているとは、拙者は不勉強にして聞いたことがない。

### 4. 姓が先き(左)で名が右になる例

4. 1. テレビやラジオ等では、東洋人の名前は日本でと同じ様に呼ぶ。ホーチミン (Ho chi-ming 又は Hô chi minh [胡志明]), Mao Ze-dong (毛沢東), リー・クワンユー [現シンガポール首相]<sup>③</sup>

欧米人の場合は、ジョン・レノンの様に名+姓だが、「イギリスのサッチャー首相」とか「アメリカのブッシュ大統領」……等家族名が出て来る。もっと正式に言う場合は名+姓となるのだろう。

4. 2. 百科辞典でも姓+名となる。例えば、

a. 「ダーウィン, Darwin 1) charles Robert 1809 2. 1.-82. 4. 19…

2) の孫で……『種の起原』……<sup>④</sup>

b. Linnè Carl von (1757)<sup>⑤</sup>

4. 3. 本屋の図書在庫目録。例は、

## 人名雑考(裁下)

Gutzen, D., N, Oellers u. J.H. Petersen: Einführung in die neue dt. Literaturwissenschaft: ……<sup>⑥</sup>

ここでは最初の間は姓+名で、二番目・三番目は名+姓となっている。

4. 4. 本の中の文献目録。例は、W. Abraham, B.A. Abramow ……<sup>⑦</sup>

この本では名の方が最初の一文字のみ出ているが、姓の方のABC順に並べられている。もう一つの例は、Austin. J., Baumgärtner. K ……<sup>⑧</sup>

4. 5. スウェーデンの電話帳。<sup>⑨</sup>

Abrahamsson Leif

      /          Marianne

Adamsson Andre o. Brigitta

Ahlström Anika o. Leif (姓+名の順)

名の方も夫婦で出ている場合でもABC順だ。いつも夫が先きで妻が右にある訳ではない。日本よりもはるかに女性が強い国で、パーティー等での記帳の時は、奥方が先きに名を書き、旦那はその下に書くという国柄だ。ここでも名の方までABC順で、しっかりと男女平等を守っている。

4. 6. 過日サラエボで行われた新体操選手権大会をT.V.で見た。字幕が出ていて、選手の名前が出ていたが、姓+名の順で、姓は全部大文字で、名の方は最初の一文字のみが姓の右側に出ていた。字幕はユーゴスラヴィアの放送局で作っているらしい。こうした書き方はこれからも増加してくるのではなかろうか。

5. 上記から見て取れるのは4. 4. の最初の例は、その次に出て来る例へ移っていく中間段階であろう。姓+名の順序は、やはり公式的・学問的な場合かもしれないが、日本や他のアジアの幾つかの国で行われて

## 人名雑考(藪下)

いる表記法と一致しているし、又3.の学名とも一致している。そしてそれなりに合理的である。

ところが一般の人には、何か Taro Yamada という書きの方が合理的で、良いものだと思われているらしい。そう思っていない人でも、何か欧米的で、カッコいいと思っているのかもしれない。

たしかに拙者はドイツ語教師をしていて、何回か渡欧しているし、良い面もずいぶん見て来た。が又悪いと言おうか、マズイ点も見た。高校生時代はドイツにカブっていたが今はそうではない。日本人である事をヒシヒシと感じつつ、商売だから、見聞をひろめようとして出掛ける。何も向う流を真似する必要はない。YAMADA Taro なる書き方にこだわっている。合理性があると思う。その証拠が上記の如し、という訳だ。

6. 尚、この際だから言わせてもらおうと、明治時代、日本語をやめて英語だかフランス語を国語にしようとか、第二次大戦後に志賀直哉だったかが日本語をやめてフランス語にしようと言ったとか、どこかで読んだ。この二つの事はそれぞれ理由があつての事だろう。然し私には承服できない。さきの戦争中、米軍の偉いのが、「日本語は、意志をうまく相手に伝えられない言語だ。」と言ったとか。その弱点をついて作戦をねったとか云われている。これも私には肯定できない。日本語で、きちっと軍令を伝える事が出来ると思う。それに英語やフランス語が明晰で日本語はダメだ、と言うのも、さてどうか。日本語には日本語の明晰な書き方、言い方があると思う。

7. その日本語は明晰でない、とか非論理的な言語だとか言う訳だが、欧米流の論理に合わないからだろう。ところがこれも常識だから、誰も言わないのか、拙者が不勉強だからか知れないが、論理学の式が先きにあつて、これに従っている言語が合理的だ、というのは実は逆だ。自然

## 人名雑考(藪下)

言語が先きにあって、それに従って論理式ができあがったのだ。だから欧米の論理学は欧米の自然言語に合った論理式ができるのだ。残念だがそれには日本語は合わない。ところがここに「逆ポーランド表記法 (reverse poland notation)」という論理の表記法があって、これがれっきとした論理学の表記法で、日本語の語順に近いものだ、と物の本で読んだ。(残念ながら学問的読み方をしなくて忘れていたが、)このポーランドの学者が考え出した表記法でも、立派に論理的思考を行う事ができるのだ。とすると、日本語をもとにした論理学もできるはずだ。(この事については別の機会にもっと勉強して書いてみたい。)何も欧米流に合わないからと言ってガッカリしたり、日本語は論理的思考に向かない言語だ、と行って卑下するには当らない。

## おわりに

いくら雑考と銘打ってはいても、もう少し学問的に書けばいいのに、それができなかったのはひとえに不勉強のなせる業、致し方ない。

## 注記

- ① 「日本国語大辞典」
- ② 論文：もりいずみ カール フォンリンネ 雑誌「Newton」1984年、11月号、P128-133.
- ③ 「東洋人物レファレンス辞典」(索引 P.134)
- ④ 「岩波西洋人名辞典」(P.794)
- ⑤ 「Der Neue Brock haus」vol 3. s. 394
- ⑥ 「ナウカ洋書案内」A-364. 1989年7月
- ⑦ Helbig. Buscha: Deutsche Grammatik
- ⑧ Harro Gross: Einführung in die Germanische Linguistik
- ⑨ Telefonkatalogen 1983/84 Uppsala